

# 三方五湖周辺の地形と集落

宇野 蘭

調査地域は福井県の南西部、凸形の本州島の北部と凹形の南日本との接する中間地帯に位置し、前面若狭湾に面する。4年間の総復習といった意味から地形及び集落が変化に富む三方五湖周辺地域に於て自然と人間の密接な結びつきを通して地域性を把握しようとするが表面的な捉え方に終わってしまったことは残念である。地形分類と集落の形態、その経済的機能の分析及び集落における漁業権の意義についてそれらの間の相互関係を見ることが論文の中心であり、その内容構成は次のようになっている。

## オ一部 地域概観

### オ一章 自然的環境

### オ二章 人文的環境

## オ二部 地形

### オ一章 地形区分

### オ二章 耳川平地

### オ三章 三方平地

### オ四章 断層

## オ三部 集落

### オ一章 各集落の特徴

#### オ一節 集落の経済的機能

#### オ二節 集落の立地条件

#### オ三節 集落の形態

#### オ四節 集落の起源

### オ二章 集落における漁業権の経済的社会的意義

#### オ一節 漁業権の現状

#### オ二節 漁業権の歴史

#### オ三節 漁業権の及ぼす諸現象

### オ三章 各集落の農業漁業経営の特徴

#### オ一節 純漁村集落の二類型

#### オ二節 純農村

## オ四部 要約

この地域一帯は地盤運動が非常に激しく断層の発達が著しい、地域中央を南北に縦断する三方断層を境にして東部地域は若狭湾の沈降地域の内部にあ

つて部分的に隆起している箇所、西部の沈降地域と対照的な地形を示している。なおこの断層は現在もなを運動を続けている活断層であることから崖下の扇状地及び西縁の海蝕崖の発達は非常に悪く、断層崖背後には三角末端面層状断層、又干潟地、砂丘、砂洲、洪積台地、埋積谷、撓曲、変位を受けた扇状地等、狭い地域に様々な地形の *type* が集約的に発達しているのが特徴的である。壮年期山地の沈降したこの地域は内部に山地に囲まれた5つの湖を包含し、前面は岩狭湾に面する。従って集落によりあるものは嶋海村、あるものは嶋湖村、及びその両方に面するもの、またそのいずれにも面していない山に囲まれた集落等その生活環境は様々であり、300m前後の低い山地を境にして全くその景観が異っている。従ってその経済的機能は純農村～純漁村までその中間 *type* の様々な段階を持つ（この分類の基準は(1)全戸数に対する漁家数の割合、(2)一戸当平均耕地面積 (3)耕地に対する畑地率、(4)収入源によった）このような集落の経済的機能の相違及び様々な地形 *type* が集落の形態に反映して、例えば日向集落に見られる道路を隔てて低層で小さい母屋と舟小屋、腰折の分離した典型的な純漁村形態から北前川、その他に見られる純農家の間取を持つものまでが狭い地域に隣接して存在する。又第二章で述べた集落の生業に関連を持つ漁業権についてはそれが単なる漁獲の権利以外に交通路としての権利、さらには湖そのものの所有を意味すると考えられ、その具体的な例が湖の干潟地の所有に表われている。又土地の有利性と結びついた集落の発達、すなわちその勢力の拡大による漁業権の獲得が見られ、現在の漁業権の所有は集落の起源の古さとその後の論争の正史の結果によるものであることがわかる。このように貧弱な生涯資源を廻っての絶えざる争いの正史によってこの地域が如何に経済的に恵まれていないかがわかれるわけである。又第三章で述べた農業、漁業経営の特徴としては山地に囲まれ、扇状地の発達も悪く、平地に恵まれないこの地域の農業経営は一般に小規模な零細経営で兼業農家が集落の大部分を占め、この傾向は最近特に著しい、しかしこの中においても成出のようにその経営規模もかなり大きく（1戸当平均耕地面積1.2町—水田のみ）、ほぼ農業のみに完全に生活の基盤を置いている例外的なものも見られる。又土地利用の面では西部地域の海岸に面した山腹の利用と比較的耕地に恵まれた東部の山地の全くの未利用状態（これは日本の土地利用の一般的特徴）との対照が著しい、さらに同じ主観従漁村という経済機能を有していてもその内部構造を見てみると集落内の各農家が農業、漁業の両方に従事しているものと漁家が完全に分離してしまっているものと相違が見られるがその原因についてははっきりしたこ

とは解らなかつた、純漁村に關しては交通の発達及び湾流の変化によつて明治以後漁業經營の面で優劣の立場、従つて集落の會富が逆転してしまつた例が見られる。これは湾奥の塩坂越集落と岬突端の常神をはじめとする集落とでは最初は内陸に近く交通の便利な湾奥に位置する塩坂越集落が市場に恵まれ経済的に豊かであつたが動力船の導入によつて交通の便が良くなつたことその他経済的社会的機構の発達によりこれらの集落も同様に各地に自由に市場を獲得できるようになり、さらに海流の変化によつて湾奥にあまり魚がよつたなくなつたこと、又北方の岬突端における大謀網の設置によりさらにこれが増進されたこと等が主たる原因となつてゐるのである。最後にこれからの發展方向としてはやはり変化の多い景観を利用した観光事業と地域の特色を生かした農業改善(濕熱な気候と山腹の利用による果樹栽培等)に力が注がれよう。

## 千里山丘陵地域の地理学的考察

レ ジ ム

北 村 和 子

調査地域は、大阪市の北方約15kmに位置する千里山丘陵とその西側に古状についている豊中台地を含む千里山丘陵地域である。東を淀川、西を猪名川の沖積地に埋められ、北は断層によつて古生層の山地と分かれてゐるこの地域は、南北8km、東西10kmの塊状の丘陵地域であり、丘陵は30-80mの起伏の多い地形を呈している。この地域を特色づける地質は舞新〜洪積旧期の大阪層群という、粘土、砂、礫の互層で、海成〜淡海性の堆積物である。

この地域の人間居住の歴史は古いが、かならずしもそれは開発の程度を示すものではない。むしろこの地域は、大阪市の近郊にありながら最近まで開発の遅れてゐた地域である。その主な原因としては①水の不足、②地形の複雑さ、③交通の不便さの3つが上げられる。

調査のはじめとして、この地域の地形分類を、空中写真、地形図、現地調査により行つた。丘陵斜面と谷底平野、段丘地形がこの地域の地形の特徴である。なかでも丘陵斜面、谷底平野は南北方向の谷の優越する東部にはっきりと見られる。段丘は西側の豊中台地を主とする千里川の4段の段丘と北側に旧勝尾寺川の作ったと思われる段丘(1段)が知られる。豊中段丘の4つの段